

社会臨床の視界

(3) 社会臨床という思考のレッスン

- メビウスの輪のようにねじれてつながる関係性を理解する -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. メビウスの輪のように

何らかの臨床上の課題をもつ人とそれを取りまく人の「あいだ」に関心があるという話しをしてきた。その「あいだ」は「ねじれて・つながる」ようだ。しかしこれは、循環と再生を意味するメビウスの輪のようなつながりでもあると思う。何故なら、「私」はそうした臨床問題を持つ人と同じこの時代と環境を生きているからだ。このつながりを意識できるようにしたいと考え、「臨床社会学」という演習や講義で教えている。このマガジンで連載しているような視点から、臨床問題やその背景にある社会病理、あるいは逸脱行動やその背後にある日常性について学生たちとともに考えるようにしている。

学生たちのものの見方は社会の意識、態度、認識の縮図としての自然発生的なものなので、それを省察的な方向性へと変えていくことには意味があると考えている。とりわけ、いじめ、ドメスティック・バイオレンス(DV)や虐待という家庭内暴力、ひきこもり、リストカット、自殺、非行、犯罪、各種の依存症などへの関心は高いが、その見方は一面的であることも多い。くわえて、メディアによって影響された関心と知識は強固でさえある。ステレオタイプ化されたものの見方が柔軟な学びを邪魔している。

知的で冷静な省察にとって、まずはそうした構築物を取り除くことが重要となる。これは「脱学習 unlearn」そのものである。焦点としているのは、心理化する社会では臨床問題や逸脱行動が「個人化された問題」として観念される点である。その背景を成している社会病理とそれらが生成する関係性を視野に入れることへと意識を脱構築すべきだと思う。個別性のなかに社会性を読み取る視点とでもいえようか。自己責任や自立を強調してきたゼロ年代の意識と感性を反映しているので、「脱学習」は心理化、個人化、医療化などという類型的で型にはまった思考の傾向を対象にしていくこととなる。

さらに、感情までもがステレオタイプ化されていると思えることもある。何故なら、学生たちはよく「感動」するからだ。ドラマやニュースなどをとおして飼い慣らされた「感動」がある。あるコンテキストがつけられているようにも思えるので、「脱感作」を試みる。心理療法的な意味での脱感作法は不安、恐怖、緊張、葛藤を生起させる事柄を想定し、徐々にそうした感情を受け入れていくという技法であるが、ここでは比喩的な意味で用いている。慣らされた感情表出を置き換えていくことの大切さを考えるために使っている。エモーショナル・リテラシーといった方がいいかもしれない。

臨床問題への関心や逸脱行動への興味を

動機づけるのは身近な体験や個人の経験、喧噪のなかの報道、不条理への憤り、ヒーローな物語への共感など多様であるが、いずれも感情が駆動している。理性よりも感情はパワフルである。であるがゆえにクールダウンが要る。そのための「脱感作」である。非合理的な方へと若者を捕捉する感動の意味づけを相対化することは社会臨床の観点から必要である。最近の体験では、『告白』という小説とその映画作品について多くの学生が「感動」したということに驚いた。原作がエイズウィルスを凶器として扱っていることに違和感以上の問題性を覚えたこともあり、批判的なものの見方が衰退していると思った。

以下に紹介するのは断片でしかないが、常識的な思考の枠付けを可視化させ、脱構築していくためのレッスンである。1) 社会のもつ支配的な物語(意味づけの体系)の相対化、2) 医療化などのパワーをもつ言説と政策に傾斜しがちなことの気づき、3) リスク論的なものの見方の前景化、つまり保険統計的な思考が支配するリスク社会の理解、4) 異なる視点からみると同じ事態の別の相が見えてくるダブルスタンダードに気づくことの大切さ、5) 二分法的思考による選択肢の喪失に敏感になること、6) 相互作用という視点を会得すること、7) 関係の非対称性に配慮すること、8) 認識の地と図の関係を理解し、問いと応答を反転させてみて相対化を試みること、9) 自己へと再帰する個性発揚社会の負荷があること、10) 絆とつながりのかたちが独立変数となることの意味という諸点である。知の解毒とでもいえようか。

こうした「脱学習」と「脱感作」は「認知 - 行動 - 感情」のつながりを意識したも

のである。学校で勉強していた頃、補助線を引くと数学の問題が解けたように、「思考の補助線」のようにしてこのレッスンが効果を発揮すると、ある種の凝り固まった頭が揉みほぐされていくようなこととして機能するとよいと思っている。くわえて、対象となる臨床問題や逸脱行動に関心がむかう「自己=私」との関連をつけて欲しいと願ってもある。そこに関心をむける「私」とそれら諸現象の「あいだ」にはなお溝があり、第三者的な好奇心が支配している(これは臨床問題や社会病理へのメディア的関心でしかない)。しかしその溝は「ねじれて・つながる」ひと続きの社会現象なので、せめてその「つながり方」については意識をもつことが大切だと考える。複眼的なものの見方、微視的(ミクロ)な見方と巨視的(マクロ)な見方の会得、関係性を理解するための俯瞰的な知識、相互作用の形式に関しての理解、認知的な枠組みの再構築、こうした事項に関心をもつ自己の立ち位置の明確化をねらいとして臨床社会学・社会臨床学の学習をまずはすすめていく。

同時に、これらを学ぶ他者とコミュニケーションする<場>の形成にも努力している。インターネット上にある授業のサイトでコミュニケーションする。演習で発表が終わるとそれに私がコメントをする。学生たちもそれに応えるようになっている。

こうした作業は、「臨床問題を関係性の病理として思考するためのレッスン」である。もちろん、たまたま大学にいたので演習などの場面を強調しているが、メディアも含めて社会のなかでも必要な作業だと考えている。

2. 関係性の病理として思考するためのレ

ッスン

1) 社会のもつ支配的な物語(ドミナントストーリー)の相対化 - ひきこもりのその後からはじまることへの想像力 -

たとえば、7年間にわたってひきこもっていた兄を映画学校に通う弟が撮影し、卒業制作とした映画『home』を観て、ひきこもりについて考えることとした。その兄弟を大学に招いて対話をしたことがある。この映画のラストで兄は家を出たのだが、出たあとの空っぽのガレージが映されている。そのことをどう感じたのかと兄は参加者に問いかけた。長い間のひきこもりから脱出して安堵したと多くの人が感想を漏らした。しかし、兄は、「この映画をみてよかったと思う人はひきこもりの現実を理解していない。いままでそこで苦しく生きた場所が空っぽになるということの、家を出たあとにはじまるその人の苦闘にこそ想像力を働かせるべきだ」と一喝したのだ。「私が家をでたから安堵したと思うその意識をこそ相対化して欲しい」、「ひきこもりから抜け出すことだけの過程に関心を寄せることは世間のみんなにとって安心できる物語でしかない意識」だと心情を吐露した。参加者にとってこの問題提起の衝撃は大きかった。さしあたりひきこもらずに生活してきた人の持つ「常識」=物語化、つまり支配的な物語(ドミナントストーリー)に鋭い刃がむけられたともいえる。

2) パワーをもつ言説への傾斜に気づくこと - 医療化言説は関係性を一面化する

人工内耳の埋め込み手術をめぐる家族の

葛藤と逡巡を描いたドキュメントをみる。この映像は、聞こえるようになるための医療に希望を託す家族の思い、言語機能の臨界期までに手術しなければならないことをめぐる逡巡、その手術で聞こえる音の具合(医療技術の現段階に関して、ドキュメンタリー映像では実際にどのように聞こえているのかについての音のシミュレーションがなされていて、ノイズのある音であることがわかる)などをめぐって悩みが深まる日々を追っていた。さらに手話の問題も紹介する。その環境に手話を理解する人たちがいる状態であれば家族や当事者たちの葛藤の内容は変化する。実際に手話を使って暮らす地域の人たちの取り組みが紹介されている。もちろん日本語手話とろう者の手話の違いも学習する。

これらの関連する諸事項を考慮にいれて、人工内耳による医療化というベクトルのもつ課題の多さを理解し、考える。聞こえるようになればいいのではないかという見地は健聴者の視点から医療化された仮定なのでそれを溶いていく。

そのために、いったん、ろう者として生きる環境の整備の方向性を対置して検討を加え、周囲の環境によって障害性が変化することを考える「社会モデル的な思考」を検討してみる。性急な判断ではなくこうした思考をとおして、医療化という志向性はどんな問題を内包させているのか、さらに別の問題を引き起こす可能性はないかなどについて考えてみる。

こうして、医療化という志向性は健常者中心社会の意識によって支えられていること、ある方向性へと問題解決を導く動力として作用すること、しかし医療化には功罪があることが視野に入ってくる。問題解決

の幹としての医療化は日常生活において極めてパワーのある志向性であることがわかっていく。もちろん、人工内耳以外にも、医療化による自己決定の問題群は、不妊治療、出生前診断、臓器移植など数多い。

3) リスク論的なものの見方の前景化 - 保険統計的な思考とリスク社会 -

エイズ感染拡大予防のために「カレシの元カノの元カレを、知っていますか」というコピーを公共広告機構が作成し、大規模な宣伝をおこなったことがある(2006年)。この言い方は一人ひとりの行動と意識に関して不安を喚起し、それを駆動力にする構図である。かき立てるようにして、安易な性行動の自粛とエイズ検査受診を促進させようとする脅迫的なメッセージとなっている。学生たちにこのアプローチは有効なのかと問いかけた。そのことを確認するためには若者の性行動についての理解が要る。「若者の性行動と性感染症予防対策」(木原雅子・木原正博著、『日医雑誌』第125号第9号、2001年11月)などで調べることを指示した。この研究は「首都圏の10代カップルのセクシャルネットワークパターン」の調査の報告である。男女ともに複数の相手と性行為をしているキーパーソンにつながると感染のリスクが増すことはわかる。互いに複数の性的関係をもつ者同士が結びつくカップルの組み合わせが12.3%であるという。また、このコピーは男性が奔放な性行為をしていることが前提になっている。そうした複数の相手と性関係もつ男性とそうではない女性という組み合わせは10%であるという。逆に、女性もまた複数の男性を相手にしていることが数字で示されて

いる(女性を起点に考えると多様なパターンで合計14.3%)。こうしたパターンの組み合わせがあり、それに対しての呼びかけが重要となることがわかる。

そしてそもそも現在つき合っている相手と過去の恋愛遍歴について話をしないだろう。つまり、解決不可能な不安が喚起されるだけだ。不安を駆動力にして何かをさせようと指示し、煽る言説はリスク社会の反映である。それを保険的思考といい、そうした生き方を脅迫する社会の証左だといえる。「他人をみたらリスクだと思え」といえば極端かもしれないが、関係阻害的なコミュニケーションにいたることは必至であろう。現に、「他人を見たら原告と思え」とリスクマネジメントセミナーで語る弁護士がいた。法化社会はそうのように進展しており、ハラスメント、クレームなどをはじめとしたリスク対応が必至となるような「安全安心社会」が進行している。すでに訴訟社会の米国はそうになっており、日本では起こりにくい裁判が提起される。

同じ呼びかけるなら、セーフターセックスについてのコンドーム使用などポジティブな方がいい。この素材を用いながら、リスク、予防や防止、保険的行動と意識、結果責任や社会的費用としてのコストなどが前景化している社会を理解する。こうした脅迫的指示を受け入れてしまう心性が構築されていることがわかってくる。一見すると素直に受け入れてしまいそうな健康と病気をめぐるレトリックにつきまとう陰画像を見逃さないために、「健康化(健康社会化)」というベクトルが構築する副産物について他の事例で調べてみることをすすめる。あわせて「肥満と飢餓」が同時存在するグローバルイゼーションにも言及し、健康を

めぐる言説と政策の陥穽への気づきを促す。

4) 異なる視点からみてもみること - ダブルスタンダードにまみれた記号に敏感になる -

大学の近くの狭い路地に「暗い夜道、痴漢に気をつけましょう」という立て看板がある。デジカメで撮影し、学生にみせる。これをそのまま受け取れるかと問う。大阪市営地下鉄の「ちかん、あかん！」というポスターも紹介した。この両者には決定的な違いがあることに気づいて欲しいと話しを続ける。前者は被害者に呼びかけており、後者は加害者に呼びかけている。前者は被害者非難につながる言説であり、性犯罪、虐待、DV などの暴力被害者自身の落ち度を責めることになる。これは「二次加害問題」になることを説明する。他にもこうしたダブルスタンダードを身近に探してみようと宿題をだす。たとえば、厚生省時代の1999年、「育児をしない男を、父とは呼ばない」という宣伝がなされたが、これはどういう効果をもつのかなど。私はこれも同じく脅迫による指示なので、男性の育児参加を促進させる目的にとってはよくないと考えている。

何気なく見るたて看板やコピーではあるが、そこには、ジェンダーのバイアスなどが埋め込まれている。脅迫型コミュニケーションの解釈をとおして何かの価値や規範が再生産されていく様子が理解できる。

5) 二分法的思考による選択肢の喪失 - 本当に必要なことを考える -

また別の日には、薬物依存症者が回復す

るための生活共同体である「ダルク」のことを紹介した。医療と刑罰の「あいだ」を考えることがねらいである。薬物を保持し、使用すると、各種の取り締まり法令で処罰されるが、彼ら/彼女らの実際は依存症者である。適切な医療が要るが、依存症は慢性的な病なので生活のなかで治療するリハビリ的な場所が要る。その「あいだ」に長期にわたる回復のための中間施設があり、それを「治療共同体」という。それへの参加を促す司法を「治療的司法」という。それは処罰だけではない、あるいは処罰の一環として参加を指示する制度である。前回に記したような加害者臨床への理解を深めていく(この『対人援助学マガジン』はこうして授業に活かされている)。処罰だけでも、また医療だけでもない、二分法的思考の「あいだ」に真のニーズが潜んでいる。

6) 相互作用の視点を身につける - 親密な関係性だからおこる家庭内暴力 -

家庭内暴力への関心が高い。それが生成する関係性を把握するには「親密な関係性」という相互作用の場の特性理解が鍵となる。私的領域、公私関係、親密圏などの言葉でとらえるとよいのではないかと提案する。公共圏と対をなして用いられている。もちろん家族関係も含むがそれをこえて広がりのある関係性を示す言葉である。たとえば恋人同士の暴力はDVに近い特性を帯びるので、親密な関係性における暴力として広く把握する。親密な関係性には、愛情を交わすことや無償のケア行為が含まれ、その相互行為は他者との境界(バウンダリー)を越え、プライベートな領域と交わることで成り立つ。親密な関係性を特徴づけるケ

ア行為に内在して感情的相互作用が生成する。ケアする者とされる者の関係なので、そこには感情や情動の交歓を含んだ微視的環境が構築されている。愛着、安全・安心、信頼などの肯定的な特性がそこに由来する。しかし、であるからこそ、葛藤、紛争、揉め事が距離感の喪失においてあらわれる。暴力や虐待の温床になる関係性といえる。暴力と愛情は両義的に親密な関係性において結びつき、メビウスの輪のようにねじれてつながる。

こうした相互作用を特徴づけるいくつかの理論を紹介した。そのひとつは、たとえば「正義とケア」問題である。その論者であるキャロル・ギリガンの『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(川島書店)をとりあげた。ギリガンは従来の道徳の発達心理学の根源的な批判を試みている。「子供の心理的成熟は自立性の獲得、個人主義的な権利主張の能力、抽象的基準に基づく正義の判断の能力などの指標に照らして判断されてきた。しかし、そのような指標とは別に、人間関係への文脈的理解、他者への配慮(ケア)などの資質もまた重要な成熟の指標たりうる。後者が従来見落とされてきたのは、それが女性と結びつけられていたからであり、ここには男性中心の発想のバイアスがある。」という。これまでの道徳の発達心理学は女性というもうひとつの声やケア役割を無視して正義の話ばかりをしてきたと批判しているのだ。「正義とケア」という視点からすると、親密な関係性において正義はいかにして成り立つのか、ケア行為に内在して脱暴力はいかにありうるのかという課題が認識できる。家庭内暴力の背後にある相互作用の特性を把握する枠組みとしての親密

な関係性論とそれを正義とケアの視点から把握することをおして、家庭内暴力についてのセンセーショナルなメディア的な関心を乗り越える。

7) 関係の非対称性という視点でみる - 親とは誰かについて根本から考えてみる -

激しい家庭内暴力のようなことだけではなく、心理的な緊張感や窮屈感、意志疎通の困難さ、依存と自立の葛藤など総体として家族関係に注目が集まる。そうした関心を問い詰めていくと、親とはどんな存在なのかという根本的な問いにたどり着く。

親は子どもの存在がないと成り立たない。しかし、子どもは親がなくてもありえる(なんらかの理由で親がいない場合はありうるし、社会的養護の仕組みがあれば生きていける)。親子関係とひとくちにいうが、そのなかには、影響力を行使するという意味での権力関係があり、親の絶対性がある。これを関係の非対称性という(親子、夫婦、師弟、国際社会の北と南などたくさんある)。しかし逆に、親は子どもがいないと成り立たないという意味で、存在としては子どもに依存しているともいえる。親の持つ力は強いけれどもその根拠は脆弱だということになる。そこから事態は複雑になり、それを覆い隠すかのようにあるパワーが創出される。たとえば親権である。それを根拠に「あなたのためを思っているんな指示をし、規制を加え、干渉する」というパターンリズムが生成する。親の特権である。しかもそれがあなたの安全のため、幸福のため、将来のためというのだ。パターンリズムという概念を理解し、親子関係を社会的に理

解し、親とはいかなる存在なのかについて家族体験をもとに考えていく。家庭内暴力の多くは親子関係の病理としてあらわれる。多様な事件や事例が愛着の歪みを含む関係性の病理としてあることを理解するためにも心理的な言葉とともに社会的な言葉も加味させて整理しておくことをすすめる。家族は誰もが体験していることなので分かったような気になる。それを的確な言葉で理解していくことは、私的体験を公的問題へと抽象化する格好の素材となるので思考のレッスンになると伝えている。

8) 認識の「地と図」の関係を理解する - 説明する側と説明される側の問いを反転させてみる -

今の学生たちは不登校やいじめが日常的な現実となっていた世代である。もちろん、何らかの事情で学校に通えない子どもは以前からもいた。しかしそれはたとえば「長欠不就学」と呼称されていた。また、「登校拒否」という言葉も登場した。今は不登校だ。ラベルが変化した。見方が変わったので、逆に問かけるといい。不登校とは何かという問いを考える際に、「どうして自分は学校にいったのか」と自問自答してみる。また、「どうして大学のこの演習クラスにいじめはないのか」とも(これは臨床問題が生成する環境や生態を把握しようとするアプローチである。とくに逸脱行動の発生を環境要因に探るための「日常活動理論」として注目されているものである)。不登校やいじめを理解する際に、どうしてそうならない現実が他方であるのかについて吟味してみるということである。自分はどうして学校にいったのか、大学の演習

クラスにはどうしていじめはないのか、というこれらの問いは、常に臨床問題が「説明される側」として対象化され、観察し、理解し、解釈する側、つまり「説明する側」とのあいだの溝をもって問かけられてきたことを相対化したいからである。

この問いの構図は関係性において思考することの阻害要因になっている。医学のように因果関係を特定できない社会病理はその<場>の成り立ち具合に関連する変数において考える。相互作用というコミュニケーションを独立変数にするということでもある。そこには、関係の非対称性というパワーとコントロールの関係があるだろうし、愛着関係やその歪みがあるだろう。仲間関係が昂じていく思春期青春期に特有のピア関係とその負の側面としての「友だち地獄」現象もある。

さらに、個人として尊重され、個性発揚を扇動され、何かにむけた業績達成(学業、スポーツなど)が価値をもつ空間となっているので、子どもたちはかつての時代とは異なる程に脆弱さ(ヴァルネラビリティ vulnerability=虐待誘発的とも訳される、傷つき易さのことを意味する言葉)のなかを生きていることも見逃せない。

こうした特性をもつ時空間としての学校にいくことができた自己の理解をすすめることは、何かが肯定されていたり、関係性が一定水準で保てていたり、業績的な達成が見られたりなどという面があったからであるし、逆に、何かを抑止したり、規範として意識したり、苦勞を乗り越えたりしてきたからでもある。その一方で学校に来にくい心理社会的な事態になる同級生がいたということになる。その時空間のもつ意味の磁場が異なるものであったということに

センシティブであるべきだろう。

いじめの発生はさらに先鋭的に自己の存在の形式を問うだろう。いじめのある時空間にいた自己は、傍観、無視、代弁、加担、逃避などの何かの関係性の一端を占めることになる。

しかしその問いは厳しくもあるので、大学の演習にいじめはどうしてないのかと問うことでそうではない環境＝空間のあり方を確認し、そうした緩い環境＝空間にするにはどうすればいいのかという問いへと変換し、自己の立ち位置が必ずしも先鋭化しない問いを迂回路のようにしてみることも発想を切り替えていくことになる。どうしてこの生徒はいじめられたのか、どうして学校にいけないのかという問いは被害者非難に陥ることもある。単純な学校非難でもない、また、登校することに目標をおく学校心理的支援だけでもない方向性を理解するためにも「私」との「あいだ」を架橋する問いは重要ではないかと示唆し、臨床問題が生成する空間や環境の特性を理解し、そこに作用している相互作用とコミュニケーションの特徴を把握し、個人化しない方策を導出してはどうかと発問する。環境の多様性の幅を広げることの必要性を理解するための問いである。

ここからいえることは、認識が成り立つ「地と図」の関係を反転させることでみえてくることは多いということだ。常に脆弱さのなかにある人々は説明されるべき存在として非対称的な関係のなかで置かれている。マイノリティ（少数派）は常に説明を要請されるという点において不公平である。どうして同性が好きなのかと同性愛者は質問されてきたが、どうしてあなたは異性が好きなのかと異性愛者が質問されることは

あまりないだろう。それと同じである。

9) 自己へと再帰する個性発揚社会の負荷 - 当事者研究風に「シューカツ(就職活動)」をながめてみる -

個人化し、心理化する社会における問題を端的に表現するテーマのひとつが働くこと、とりわけ就職活動である。「シューカツ」といわれている。ニートやフリーター、不安定就労問題、若年者の就職ミスマッチ(三年以内にやめる新卒者が多い)などということによって世間が関心をもつからだが、やはり学生たちは「私」の問題として直面している。

就職活動は景気の波に翻弄されていつの時代にも悩ましいことである。しかし、昨今の「シューカツ」は事情が変化しつつある。職を得る過程において、じつに「あいまいな規準」にむかっていくことがもたらすストレスが高いのである。技術系は別にしても、社会が複雑になっているので文系にはそれ相応の高度な力が求められている。それは人間的な対人関係とコミュニケーションに関する諸力能だとされる。しかし、それはなかなか明示しにくい。とりあえず、「コミュニケーション力」、「対人関係力」、「社会人基礎力」などと一般化されている。だから、企業研究にくわえて、適性理解と自己分析を入念に行うことを奨励される。こうした自己分析は大事だとされるが、その内実は内側をみてもでてこない。相互作用と関係性のなかでしか先述の諸力は磨かれない。「シューカツ」が内面のみを対象として心理化されているので、就職活動の過程が自己をめぐるって旋回し、負荷になる。

「シューカツ」のバイブルといわれてい

る『絶対内定』(杉村太郎氏らによる一連のシリーズ本。ダイヤモンド社)を読んだ学生が「なんだか迷宮に入っていくような感覚をもった」という。けだし名言であろう。「コミュニケーション力」、「対人関係力」という定義できないものにむかって終わりのない旅を求められているようだとしてゼミで発表をおこなった。得体の知れないことに向かって努力するという「カフカの状況」に置かれる。これは立派な当事者研究である。

もちろん、社会病理学的には非正規雇用、格差社会、派遣労働問題、偽装請負、意欲の搾取、若年失業等というハードな領域にかかわる課題もあるのだが、こうした社会的な主題と重なる方向性への問いではなく、もっぱら「自分探しに向かうこと」は精神を追い詰めていく。当事者研究風にいるんな分析のための概念と理論を身につけていく機会だと思う。「個人的なことは政治的なことだ」という女性運動のテーマは応用範囲が広い。そこまでいかななくても「個人的なことは社会的なことだ」くらいはいえるだろう。自己責任と自立を称揚された「ゼ口年代」は、自己へと再帰する個性発揚社会を青年期として生きてきたことになる。その生きづらさが臨床問題につながる。

10) つながりのかたちの抽出 - 絆とつながり方(関係性)こそが独立変数 -

社会臨床の肝は「関係性の病理」にあると伝えている。絆の病理とは「つながり」の問題である。たとえば「トラウマティック・ボンディング traumatic bonding」という言葉がある。愛着関係のあるなかで受けた心の傷をもつ者の両価的な絆形成のこ

とである。たとえば DV 関係にありながらも今度こそは立ち直るということを期待してその関係を続けるという事例もある。子ども虐待に関しては、殴る親でも親なので愛着を感じる姿勢を示すことがある。歪んだ愛着が母子関係に沈着し、ひとつの「共生体」として観念されるとその絆の病理は「代理ミュンヒハウゼン症候群」のような事態にも至る。

また、「共依存 co-dependency」という言葉も絆の病理の一例ともいえる。アルコール依存症の夫とそれの世話をしつつ支えている妻という関係だ。もっと俗には「だめんずとだめんずウォーカー」も同じようなことを意味する。

さらに、スウェーデンの銀行に強盗に入って籠城した犯人とそこに人質となって監禁されていた女子行員が後に結婚したという事例があった。これを「ストックホルム症候群」という。理論的には「攻撃者との同一化」という。カルト集団にはまってしまうことも「絆のもつ病理」の応用問題である。「いじめが発生する集団の問題(関係性の問題)」も同じである。同調性の高い仲間集団や空気を読むという表現で閉じた関係性となると「友だち地獄」の様相も呈することになる(たとえば、[土井隆義](#)『友だち地獄 - 「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、[森真一](#)『ほんとはこわい「やさしさ社会」』ちくまプリマー新書などで指摘されているような同調志向型関係のこと)。

逃げられない事態に心理的に追い込まれていくことになる監禁事件、DV・虐待のある関係で「どうして逃げなかったのか」という質問は被害者を責めてしまう場合がある。「学習性無力感 learned helplessness」

という言葉がこれを説明してくれる。

3. 羅生門的現実という複眼的思考と社会臨床の視界

こうして具体的な事例を取り上げながら社会臨床の視界を広げていく。「木を見て森を見る」という思考が身につくことをめざしている。しかし、事例やケースの見方は難しい。事件の「原因」探しに陥ることがある。直線的な因果関係があるわけではなく、そこで作用している相互作用を可能なかぎり見る。たとえば、家族関係、母子関係、愛着関係、コミュニケーション行為、メディアの影響などだ。これらをまとめて「相互作用の視点」、「関係性の病理」としてまとめていく手法を身につける。逸脱行動、問題行動の研究では医療化、心理化した説明と語彙が多い。その典型は、原因あるいは遠因となるかもしれない「人格障害(パーソナリティ障害)」の指摘である。関係性や相互作用を取り出すと、そこには変数が多いので、「偏りのある性格や人格」として、あるいは「コミュニケーション不全」として見るとその複雑な変数の縮減ができ、因果関係もわかりやすくなるということだろう。とはいえ、それでは関係性の病理としての特性が見えてこない。医療化、心理化、福祉化、司法化(厳罰化)などとして作用する関係性の「圧縮の仕方」を解凍するように、相互作用を丁寧にみることをすすめ、わかったようなつもりになることや断定的な物言いをする研究や発言には注意をするようにもいっている。

人格障害という言葉がこうした「圧縮の仕方」をひきおこしているとする、周囲の人々のつきあい方への示唆も含めて、境

界域の垣根を高くしないような社会全体の生き方 a way of life の課題としてもそうした「圧縮」ではないような関係性を創出したいところである。

その第一歩としてすすめる「脱学習」「脱感作」である。その延長線上に「深い洞察」が成り立つ。関係性がねじれて・つながることで発現する社会病理現象を読み解くレッスンである。関係性と相互作用による微視的環境の解釈ともいえる。

学生たちとの思考のレッスンのおしまいは、黒澤明監督の映画『羅生門』(1950年)である。原作である芥川龍之介の短編作品「藪の中」を読み、映画の一部を見る。平安時代末期の混乱する京都が舞台である。悪名高き盗賊、多襄丸(三船敏郎)が山科の山中で引きおこした不思議な殺人事件の真相について複数の関係者がまったく異なる話をはじめ。それぞれリアルな物語がでてくる。同じひとつの現実でも複数の解釈が成り立つ。社会的な視点から臨床で生起している事項を考える際にはこの複眼的思考は至極当然のことだと思う。当事者の視点、複数の異なる援助職者の視点、周囲の人々の視点などが錯綜していく。

対人援助の実践と理論は個別性を大事にする。その悩める個人や家族を尊重する。同じ不登校、家庭内暴力、ひきこもり、依存症でも、その様相は全部異なる。家族関係という相互作用を対象にすれば、さらに複雑な事態となる。

しかし、何らかの問題現象、行動、心理の状態を特徴づける名前は多様ではない。名付けのその瞬間、リアルで豊かな個別性は消えていく。もちろんそうした行動はひとそれぞれに多様であるというだけでは、その悩み、不具合あるいは症状が一定の広

がりをもって存在しているという意味での社会性水準が消えていくことにも配慮がいる。個別性と社会性の折り合いをつける柔軟なまなざしを養うためにも社会臨床といういい方をしている。そのために、ここで記してきたような思考のレッスンをして「脱学習」をしておくことが大事だと思っている。述べてきたこと以外にも素材は無限にあるし、私も不断の「脱学習」をしなければならぬと思っている。ちなみにこうした「羅生門的現実」からみて面白いのは伊坂幸太郎の作品である。また、宮部みゆきの『理由』や大林宣彦監督の同映画化作品も紹介する。

しかしそんなに難しいことではなく、すでに私たちは日々、羅生門的現実を生活している。日常はすべてそうしたことの繰り返しであるし、葛藤、紛争、暴力はそこを起源とする。家庭内や親密な関係性にはつきものの揉め事である。ひとつの現実をみているが、他者はすでに私のものの見方と同じではない。さらに、私のなかにも複数の見方がある。広角レンズと顕微鏡レンズの視野、鳥の目と虫の目、俯瞰する知性と個別をみる知性、地と図の関係や木と森の図柄で物事の成り立ち具合をとおして理解すると立体的な思考となるし、みえにくいところがみえてくるようになる。

つながりのなかで自分を位置づけ、社会と世界をみて欲しいと思い、しばらく前、娘が通った中学校で保護者を代表して卒業生に一言のスピーチをしたことがある。

20世紀から21世紀へと、大きく時代が転換する時期に生をうけ、小中学生として生きてきたみんなです。1991年、生まれた時、戦争がありました。「湾岸戦争」といいます。1995

年、小学校に入学する前、阪神淡路大地震がありました。その同じ年、オウム真理教事件もありました。2001年、小学4年の頃、アメリカで大規模なテロ事件がおきました。2004年、中学入学の時、イラクではまだ戦争が続いていました。この間に、神戸児童殺傷事件（いわゆる少年Aの事件）など子どもをめぐる事件もいくつかありました。一言で言えば、「不安の時代」でした。その間に、一生懸命に見守り続けてきた母や父や先生たちでした。必死でみんなを大きくしてきたのです。だから、考え続けて欲しいのは「いのち」のことです。そのために、まずは、自分のことを大事にしてください。それが自分の「いのち」を大切にすることにつながります。そのためには「ほめること」です。今日一日の生活の中で、自分をほめてあげたいなあ、今日の自分のよかったことはこれだなあと思うことを考えてください。1年たつと365個の自分のいいところができます。毎日それをノートに書いたり、自分あての携帯メールに入れておいたりしてみてください。「宝物ノート」が出来るでしょう。苦しくなった時に読み返すと励みになります。そして、自分のいいところがみえると他人のいいところが見えてきます。ここから「自己肯定感」と「他者の尊重」が繋がっていきます。自分を大切にできる人は「他人」を大切にします。大切な人には「ありがとう」といえるはずですが、あまりにも身近すぎて、いつもそこにいるので忘れがちですが、まずは、家族、友人、育ててくれた人です。いま、心のなかでそっと「ありがとう」と母や父や育ててくれた人についてみてください。そして、今度は声にだして、「ありがとう」です。この一言でいままでの苦労が報われたと思うのが親や保護者です。生きてて良かったなと思うのです。そして今日の

別れ際に、友だちにも「ありがとう」です。最後の教室では先生に「ありがとう」です。「不安の時代」だからこそ、こうしたことを大事にしたいと思います。そして自分に対して「ありがとう」です。ここまで自分であってくれた自分の身体とところに「ありがとう」です。

圧倒されるかもしれない社会の非対称性のなかを生きていくことになる若者たちである。そのことについて諦めでもなく、リスク論的な人間関係でもなく、他者の肯定と自己の肯定が双方可能なような志向性を得て欲しいと思いながらのメッセージであった。ここに書き連ねた社会臨床のための思考のレッスンはその延長戦上にある「脱学習・脱感作」のためのものである。

この試みは常に自己に再帰してくる。臨床問題に関心をもつ学徒であるならば、自己理解や自己覚知の一環として、「自己」を関係性において理解する試みをしているはずである。とくに思春期青春期は変調するので、自己の履歴においてそれを客観視しておくことは有益であろう。長い人生のなかで変調する時期は何度か訪れるので未来にむかって必要な作業となる。こころとからだの「あいだ」は、ねじれて・つながることの連続である。それは身体化や行動化、時には症状化となる。そこに社会性を読み込んでいく思考のレッスンである。だから、自己にフィードバックしてくる。同時に、背景となる社会病理を問うので、それは社会自身の再帰性と重なりあう。単に自己の反省的省察に向かうだけでは一面的である。

その「あいだ」のつながりの端緒はすでに自己の履歴の中にある。このことの自覚

がまずは大事だ。こうして、自分のなかの他者性、逸脱を抑圧してきた規範性、その逆の子ども性、弱い自分と強い自分、見ている自分と見られている自分という具合の「内なる羅生門的現実」を直視することをおしてこのレッスンの幅は広がる。

ゼロ年代の若者たちはヴァルネラブル(傷つきやすさ)な感性をもっているので、「脱学習・脱感作」の作業はすすめやすい。最近ある学生が『17才のカルテ』(1999年、アメリカ、原作の邦訳は『思春期病棟の少女たち』草思社)と『精神』(2008年、日本、想田和弘監督、岡山市のある精神科診療所の日常誌)という映画をみんなにすすめていた。

若い学生たちとの知的格闘は、すでに凝り固まった思考や感動のかたちを「脱学習・脱感作」するのではなく、いまだかたちをなしていない状態にある未定型な意識、態度、感性を対象にしているので、徐々にレッスンは効果をみせ、その視界は広がっていく。思考を柔らかくすると未知の事柄を吸収する力が伸びていくことは希望のひとつであるのだろう。心理化する社会は「個人をセンシティブにする社会」でもあるので、その点を活かすことも可能であるような両義性をもつ。「脱学習・脱感作」の努力のやり甲斐があるともいえる。そう考えると、こうした作業から得る私の学びが多いことに気づく。

なかむら ただし
(臨床社会学、社会病理学、社会臨床学)